

# 絵本の読み聞かせと幼児教育

岸本憲一良

Storytelling of Picture Book and Early Childhood Education

KISHIMOTO Kenichiro

(Received May 31, 2022)

キーワード：絵本、読み聞かせ、幼児教育

## はじめに

ある高等学校の司書さんから、実際に伺った話である。

いわゆる問題行動が目立つ生徒が、たまに休憩時間に学校図書館にやって来て、「本を読んでもくれ」と頼むそうである。その司書さんは「はいはい」と笑顔で答え、生徒に絵本の読み聞かせをする。読み聞かせが終わるとその生徒は、決まって「ああ、すっとした」と言って出ていくというのである。

この話を聞いて筆者は、その生徒は読み聞かせによって幼がえりをし、心を落ち着かせようとしているのではないか、あるいは、満たされなかった幼児期の親子関係の代替を読み聞かせに求めているのではないか、などと考えるのである。

いずれにしても、絵本の読み聞かせには不思議な力が秘められていそうである。

本紀要の前号<sup>\*1</sup>では、特定のコミュニティーで語り継がれてきた「昔話」と「絵本の読み聞かせ」の共通点を探りつつ、それらと幼児教育とのつながりを明らかにしようとした。

本稿では「絵本の読み聞かせ」に焦点化し、それが幼児に与える効果、幼児教育に果たす役割について、さらに考察を深めていきたいと考える。

## 1. 『幼稚園教育要領』<sup>\*2</sup>と絵本の読み聞かせ

### 1-1 総則

『幼稚園教育要領』の第1章総則には、第1「幼稚園教育の基本」、第2「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」、第3「教育課程の役割と編成等」、第4「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」、第5「特別な配慮を必要とする幼児への指導」、第6「幼稚園運営上の留意事項」、第7「教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動など」の七つが示されている。

これらのうち、第1の「幼稚園教育の基本」、第2の「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」と絵本の読み聞かせとの関連について、以下に述べる。

#### 1-1-1 幼稚園教育の基本

まず「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と書かれている。「三つ子の魂百まで」という言葉が古くからあるが、一生の礎を構築する重要な役割が幼稚園教育にはあるということである。

その教育は、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」とある。これにはまず、教師が幼児との信頼関係を十分に築かなければならない。発達心理学等の研究や幼稚園教育で行われている多くの実践にあたりつつ、目の前の子どもたちをしっかりと見つめ、個々を把握し、主体的に幼児

と共に環境を創造していく必要がある。

幼稚園教育で重視すべき事項として、次の3点を挙げている。

- 1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

1においては「安定した情緒」及び「幼児の主体的な活動」、2においては「幼児の自発的な活動としての遊び」及び「心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習」、3においては「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導」について、絵本の読み聞かせは有効であると考えられる。

絵本の読み聞かせは、耳コトバ<sup>※3</sup>によって豊かに想像をふくらませた幼児を安定した情緒へと誘う。心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であると言える。また、絵本の読み聞かせは読み手である教師から聞き手である幼児への一方的な営みととらえられがちであるが、決してそうではない。聞き手である幼児の「聞く」が「聴く」に変わり、「見る」、「話す」も加わってダイアログな営みとなり、幼児の主体的な活動と捉えることもできる。

また、絵本は子どもの発達過程を意識し、それぞれに見合ったものがつくられている。幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した読み聞かせができるのである。

#### 1-1-2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

上で述べた「幼稚園教育の基本」を受けて、総則の第2に幼稚園教育において育みたい資質・能力として以下の三つが挙げられている。

- (1)豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2)気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3)心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

絵本の読み聞かせによって、幼児は様々なことを感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする。また、そこで得た知識や技能をもとに考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすることができるようになる。さらに、絵本の読み聞かせを通して得たそれらの力を活用しながら、心情、意欲、態度が向上し、よりよい生活を営もうとするようになるのである。

さらにこの項では、「第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するもの」として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10点示されている。絵本の読み聞かせとの関連と共に、以下に記す。

##### (1) 健康な心と体

生涯を支える心と体の健康は、礎として最も大切なものである。体はさておき、心の健康に関しては絵本の読み聞かせが大いに役立つ。幼児が絵本の中に入り込むことにより、様々な疑似体験と共に豊かな心を育てていくことができる。

##### (2) 自立心

絵本には、主人公が様々な困難に立ち向かい、やがて目的を達成するという内容のものが少なからずある。そのような物語は、幼児の実生活における自立に貢献するものである。

### (3) 協同性

友達と協力しながら問題を解決していく内容の絵本も多い。「ぐりとぐら」、「スイミー」、「おおきなかぶ」等、このことが主題になっている絵本をいくつも思い浮かべることができる。共通の目的の実現に向けて、友達同士が互いの思いや考えなどを共有し、協力していくことの大切さを、絵本の読み聞かせを通して学ぶことができる。

### (4) 道徳性・規範意識の芽生え

絵本には、してよいことや悪いことが分かり、友達の立場に立って考えることの大切さを主題としているものも多い。「ノントンぶらんこのせて」などは、幼児の日常にありそうなことをとらえ、そのようなテーマがよく表現されている。

### (5) 社会生活との関わり

絵本には家族との関わり、身近な地域の人々との関わりを描いたものも多い。日常生活においても、家族への感謝、愛情等、家族との関わりを大切にしつつ、身近な地域の人々との関わりへと広げて行けるようになる。

### (6) 思考力の芽生え

絵本には、主人公の言動に「なぜ」と疑問をもったり、物語の展開に「なぜそうなる」と考えさせられるものが多くある。先に述べたように、幼児が主体的に読み聞かせに向かうとき、自ずとそのようなことについて考えることになる。また、同じ絵本の読み聞かせに参加している友達の異質な考えに触れることにより、より深く考えるようになるのである。

### (7) 自然との関わり・生命尊重

絵本には、不思議な自然現象が起こったり動植物が擬人化されて登場したりするものが多くある。これらの絵本の読み聞かせは、自然への愛情や畏敬の念をもつこと、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物を命あるものとしていたわり大切にすること等につながっていくと考える。

### (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

絵本の読み聞かせの際、幼児が主として見つめるのは絵である。そのことにより、自ずとかたち等に関する感覚が養われる。また、「受け」のページや「止め」のページではたくさんの人物や動物、モノ等が描かれていることが多く、数を数える幼児も多い。さらに、幼児が見つめるのは絵が主ではあるが、同じページに文字も書かれている。自然と文字が幼児のうちに entering ことになるのである。

### (9) 言葉による伝え合い

先に述べたように、絵本の読み聞かせは読み手である教師と聞き手である幼児とのコミュニケーション行為である。間にメディア（媒体）として存在するのは、言語としては音声言語である。この営みによっても、子どもたちは多くの言語を獲得していると言ってよい。獲得した言語は日常生活で活用され、さらに磨かれていくことになる。

### (10) 豊かな感性と表現

「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる」ことについて、絵本の読み聞かせの果たす役割は大きい。物語には必ず「心を動かす出来事」が含まれると言ってよい。様々なそれらに触れることにより、子どもたちは感性を働かせ、それを磨いていくのである。そのようなことが絵本の読み聞かせで行われることにより、幼児は自ずと感じたこと、考えたことを言語で表現しようとするようになるのである。

## 1-2 ねらい及び内容

第1章を受け、第2章ではねらい及び内容が示されている。領域としては「健康」（心身の健康に関する領域）、「人間関係」（人との関わりに関する領域）、「環境」（身近な環境との関わりに関する領域）、「言葉」（言葉の獲得に関する領域）、「表現」（感性と表現に関する領域）の五つが設定されている。

それぞれの領域ごとに示されたねらいは「幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたもの」であり、内容は「ねらいを達成するために指導する事項」であるとしている。

以下、各領域に示されたねらい及び内容と、絵本の読み聞かせとの関係について述べる。

### 1-2-1 健康

健康領域のねらいの中では、特に(3)の「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する」が絵本の読み聞かせとの関係が深い。このことがテーマになっている絵本が多くあるからである。

内容については、(1)先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する、(4)様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む、(5)先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ、(6)健康な生活のリズムを身に付ける、(7)身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする、(8)幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する、(9)自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う、(10)危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気をつけて行動する等が、特に絵本の読み聞かせとの関わりが深いとすることができる。(1)、(4)については、絵本の読み聞かせの営みそのものが直接このことに関わってくる。(5)については、特に幼児向けの絵本には「食べること」が幸せにつながっているものが多いことから関わりが深いと言える。(6)、(7)、(8)については、基本的な生活習慣の育成が内容になっている絵本が多いことから関わりが深いと言える。(9)、(10)の病気予防や安全な生活についても同様である。

### 1-2-2 人間関係

物語絵本は主人公が他者と出会う、あるいは友達と活動する等によって展開されることが多く、よって絵本の読み聞かせは人間関係のねらいのすべてに関わっていると言える。絵本の主題、内容と共に読み聞かせの営みも考慮に入れ、中でも(2)「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」との関わりが深いと言えるだろう。

内容についても同様に、すべての事項に絵本の読み聞かせは関わってくる。中でも関わりが深いのが、(1)先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう、(5)友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う、(10)友達との関わりを深め、思いやりをもつ等を挙げることができる。また、おじいさん、おばあさんという高齢者が他者として登場することも多く、日頃幼児が直接的な関わりがあまりないと想像できる内容の(13)、「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」にも結び付けることができる。

### 1-2-3 環境

絵本の読み聞かせは環境領域においてもねらいのすべてに関わるが、中でも(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ、(2)身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとするが特に関わりが深いとすることができる。

内容については、直接自然に触れたり自然に関心をもつことに誘うのはもちろんであるが、絵本の主題に多くあるものに関わって特に(5)の「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」、また昔話を絵本化したものが多いことから(6)の「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」との関連が深いとすることができる。

### 1-2-4 言葉

絵本の読み聞かせはバーバル（音声言語）とノンバーバル（絵）が組み合わさってメディア化されたコミュニケーション行為なので、絵本の読み聞かせ自体が幼児の言語獲得や言語活用に果たす役割が非常に大きいと言える。当然、絵本の読み聞かせは言語領域のねらいのすべてに深く関わってくる。

まずは(1)の「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう」について。読み聞かせは、語り手が主人公や登場人物の心情を大切にしつつ、それを音声言語で幼児に伝えようとする。そのような営みを繰り返すことを通して、幼児は単に言葉を認識し獲得していただくだけではなく、自身も豊かに表現しようとするようになるのである。

(2)の「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう」について。「人の言葉や話をよく聞き」は、読み聞かせの営みそのものである。その営みに参加することで、幼児は主体的に聴き、言葉を獲得し、考え、表現し、伝え合う喜びを味わうことにつながっていく。

(3)の「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚

を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」について。「絵本や物語などに親しみ」も読み聞かせによってなされ、当然その営みの中で「言葉に対する感覚を豊かにし」、イメージや想像をふくらませることにより心情も豊かにし、「先生や友達と心を通わせる」ことにつながっていく。

内容についても、すべての事項が絵本の読み聞かせと関わりが深いものになっている。中でも特に関係が深いものとして、次の8事項を挙げておく。

- (1)先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (4)人の話を注意して聞き、相手にわかるように話す。
- (5)生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (7)生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。
- (10)日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

なお、(3)、(6)についても、絵本の読み聞かせによって磨かれ、日常化されていくものであると言うことができる。

### 1-2-5 表現

絵本の読み聞かせによって、子どもたちは言語を獲得していくとともに、感性を刺激され、豊かな心を育んでいく。このことは、ねらい(1)の「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」と関わりが深い。また、そこで得た様々な理解、豊かになった感性は、当然のことながら自らの表現へとつながっていく。(2)の「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」、(3)の「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」にもつながっていくのである。

表現の内容としては身体的なもの、音楽的なものも含まれる。絵本の読み書かせはこれらともつながっていくが、特に関わりが深い事項として以下の3点を挙げておく。

- (2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

特に(8)については、読み聞かせによる同化体験が、「演じる」に深くつながっていると考える。

## 2. 期待できる絵本の読み聞かせの特性とその効果

### 2-1 何度も読む

絵本を一度だけ読んで、あとは読まないで本棚にしまったままにしておくことはまずない。子どもは何度も同じ本を読み聞かせしてもらうことを望んでいるし、大人もそれに応じて何度も同じ本の読み聞かせを行う。

まず、そのことによる効果について考えてみたい。

#### 2-1-1 主題

物語絵本には、作品の底を流れる主題、作者のメッセージというものが必ず存在する。道徳的価値、教育的価値のあるものである。何度も何度も読み聞かせをしてもらっているうちに、それらは何となく子どもの心に響き、伝わってくる。「読書百遍、意自ずから通ず」のとおりである。

絵本の底を流れる道徳的価値、教育的価値については、感化されてすぐに行動に現れるというものではないが、しみるように心に浸透していき、幼児の人格形成に大きな影響を及ぼすことになるのである。

#### 2-1-2 言語獲得

かつて益田勝実が指摘したものに、民話と子どもの言語獲得に関わる次の三つの段階がある<sup>\*4</sup>。

- ① おとなが民話を語って、子どもに合槌を打たせつつ、話の場面場面をくっきりとイメージさせる段階。

- ② 同じ話を反覆語り、要所要所の歌や唱えことばや、リズムに富んだ文句を子どもの方に唱えさせて、部分的に語り手の側に立たせる段階。
- ③ 子どもに積極的に語らせて、おとなの方が合槌を打つ段階。
- という諸段階によって、民族のことばは、発音・語彙・語法・文型を含めて、反覆演練され、いやでもそれに習熟していくことになるのである。

この指摘は、現代の絵本の読み聞かせにも当てはまる。

①のように子どもに相槌を打たせることはないが、子どもは何度も読み聞かせを経験するうちに、自然と言葉をイメージに結び付け、そのイメージをより鮮明なものにしていく。

②については、読み聞かせにおいても全く同じように、要所要所で子どもが参加し始める。リズムに富んだリフレインや歌、かけ声、独特なオノマトペ等に、それが見られるのである。

③についても同様で、幾度となく読み聞かせをすることで子どもが内容を覚えてしまい、大人に語って聞かせる、読み聞かせをするようになる。

絵本の読み聞かせにおいても、民話同様の言語獲得の過程をたどることが言えるのである。

### 2-1-3 コミュニケーション

読み聞かせは、聞き手である子どもにとって心地よい営みである。その心地よさの中身として、知る、想像する、資質・能力を高めるといったもののほかに、読み手と聞き手との関係性を深めるということも挙げることができる。その営みを何度も繰り返すことにより、両者の関係性はますます深まっていくことになるのである。

### 2-2 絵を見る、言葉を聴く

絵本とは、絵と言葉が組み合わさって形成されている。読み聞かせの場合、子どもは絵を「見る」、言葉を「聞く」という行為をすることになる。注意深く聞くという意味では、「聞く」より「聴く」という字が当てはまるであろう。

ここでは、絵を「見る」、言葉を「聴く」ということの効果について考えてみたい。

#### 2-2-1 知識

言葉と絵をつなぐことによって、子どもは様々なことを知ることができる。具体的にも、こと等が描かれた絵を目にすることで、多くの知識を獲得していくことになる。と同時に、言葉への着眼、こだわりももつていくようになる。

子どもは未知から既知への変化を楽しみ、既知が増えていくことの喜びを味わうのである。

#### 2-2-2 想像

上に述べた新たに得た「知識」を土台にして、具体的に描かれていない場面や登場人物の心情等も想像していくことになる。単に絵を「見る」だけでなく、描かれていないものを見ようと、書かれていないことを読もうとするようになるのである。

想像を広げていくことを通して、当然子どもの感性も磨かれていくことになる。登場人物への同化を通して、他者を思いやる心も育まれていくのである。

### 2-3 集団での読み聞かせ

集団での絵本の読み聞かせ（幼稚園で先生が子どもたちに読んで聞かせるような）を想定し、その効果について述べる。

#### 2-3-1 参加

集団で見る、聴くということから、1対1の読み聞かせに比べて参加意識が強くなる。お互いに声を掛け合ったり、共に身体を動かしたりといったことが起こってくる可能性がある。

集団で同じことをすることのよさや集団で何かを創っていく価値等に気付いていく機会になると考える。

他者の存在に気付き、一人遊びとはまた違った楽しみを見つけ、集団に参加していくことにつながっていくと考えるのである。

### 2-3-2 ズレ

自分以外の他者が存在することから、子どもは解釈の違い、価値観の違い、好みの違い等の、いわゆるズレを肌で感じることになる。

絵本ではないが、次に示す岡田達信の「ウサギとカメのはなし」が興味深い<sup>\*5</sup>。ウサギとカメが駆け比べをし、スタートするとウサギはあっという間にカメを引き離す。あまりの大差にウサギは途中で一休みして、居眠りを始めるが、目を覚ました時にはすでにカメがゴールしていたという、あの話である。

これが、あるセミナーのテキストになったということである。

「明治時代の国語の教科書にはこの話が『油断大敵』というタイトルで掲載されていたそうです。逆にカメの立場から教訓を読み取れば、コツコツ努力を積み上げることで大きな成果を得る『継続は力なり』と言ったところでしょうか。」という観点の違う主題。

「ウサギは競争相手のカメを見ていましたが、カメはゴールだけを見ていたからです。」というそれぞれの登場人物のしているものの解釈。

「カメなのに陸の上で勝負をしてはいけません。カメが実力を発揮できるのは水の中です。」というそもそも論への気付き。

これらは文学には様々な見方・考え方があり、様々な解釈が可能であることを表している。おそらく子どもたちもそれぞれのこだわりを発揮して、大人にはない気付き、解釈をすることが予想される。

ズレは子どもに刺激を与え、思考や想像の深まりに導き、他者を意識し協働していくことにもつながっていくのである。

## 3. 読み聞かせをする大人に求められるもの

以上述べてきたような効果を引き出すためにも、読み聞かせを行う大人の役割は重要である。今後の課題としては、読み聞かせを行う大人にとって必要になってくる資質・能力について吟味していくことが挙げられる。

吟味していきたい観点は、「知識」、「技能」、「感性」の三つである<sup>\*6</sup>。これら三つが核として備わっていることが、絵本の読み聞かせをする大人にとって必要になってくる。そして、すでに備わっているこれらを、ますます深め、高め、磨いていくことが求められるのである。

### 3-1 知識

知識に関しては、様々な絵本の特性による分類、子どもの発達過程とそれぞれの段階に応じた絵本の効果、絵本に込められた作者や編集者の意図、願いの想定等が挙げられる。これらは、読み聞かせをする際の選書能力につながっていく。

### 3-2 技能

技能に関しては、内容を伝える、心情を伝える等、声に出して読むことの表現力がまず求められるであろう。特に、必要に応じて強弱、抑揚、間などのパラ言語に関する表現力が求められることになる。

音声言語に関する表現力だけでなく、表情等、非言語の表現力に関しても磨いていく必要があるだろう。表現力というよりも、コミュニケーション能力と言った方が当たっているかもしれない。

### 3-3 感性

感性については、自身で磨いていくしかない。自身の価値観に問いかけながら、読書や体験を通してますます心を豊かにしていくことが求められる。

## おわりに

以上、絵本の読み聞かせと幼児教育との関わり、絵本の読み聞かせが子どもにもたらす効果等について述べてきた。

今後もそれらについてさらに研究をすすめていくとともに、3で述べた絵本の読み聞かせをする大人にとって必要となる資質・能力についても詳しく探っていきたいと考えている。

## 参考文献

- 松居直『絵本を見る眼』（日本エディタースクール出版部 1978）  
古橋和夫『子どもへの絵本の読みかたり』（萌文書林 1999）  
河合隼雄、松居直、柳田邦男『絵本の力』（岩波書店 2001）  
佐伯胖『幼児教育への誘い』（東京大学出版会 2001）  
代田知子『読み聞かせわくわくハンドブック』（一声社 2001）  
矢野龍夫『読み聞かせが子どもを救う』（埼玉新聞社 2003）  
矢吹省司『絵本の深層心理学』（平凡社 2004）  
脇明子『読む力は生きる力』（岩波書店 2005）  
佐々木宏子『絵本は赤ちゃんから』（新曜社 2006）  
秋田喜代美、増田時枝『絵本で子育て』（岩崎書店 2009）  
脇明子編著『子どもの育ちを支える絵本』（岩波書店 2011）  
生田美秋、石井光恵、藤本朝巳編著『ベーシック 絵本入門』（ミネルヴァ書房 2013）  
景山聖子『子どもが夢中になる絵本の読み聞かせ方』（廣済堂出版 2013）  
児玉ひろ美『0～5歳 子どもを育てる「読み聞かせ」実践ガイド』（小学館 2016）  
無藤隆、野口隆子、木村美幸『絵本の魅力 その編集・実践・研究』（フレーベル館 2017）  
無藤隆監修『幼稚園教育要領ハンドブック』（学研教育みらい 2017）  
文部科学省『幼稚園教育要領解説』（フレーベル館 平成30年）  
藤本朝巳、生田美秋編著『絵を読み解く絵本入門』（ミネルヴァ書房 2018）  
ジム・トレリス（鈴木徹・訳）『できる子に育つ魔法の読み聞かせ』（筑摩書房 2018）  
吉田新一郎『読み聞かせは魔法』（明治図書 2018）  
杉上佐智枝『絵本専門士アナウンサーが教える心をはぐくむ読み聞かせ』（小学館 2020）  
早川裕『絵本はもっと面白くなる！』（牧野出版 2020）

## 引用文献（※の説明を含む）

- 1 岸本憲一良：「『昔話の営み』、『絵本の読み聞かせ』と幼児教育」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第53号，2021.
- 2 文部科学省：『幼稚園教育要領』，（平成29年）
- 3 大藤ゆきは「耳コトバ」日本昔話学会編『昔話一研究と資料一20号 昔話と子ども』（三弥井書店 平成4年）のp26で、「耳のはたらきについてみると、耳と心とは、目と心よりも直接にひびくようである。目で文字を読むよりも耳からきくことばの方が、音声とともにずっと心にひびく。民俗学の分類では、目で見えるものから聞くものへ、心に感じるものが一番大切とされている。」と述べている。
- 4 益田勝実：「民話の構造的把握がはじまっているらしい」，西郷竹彦編『国民教育における民話』，明治図書，1969，p26.
- 5 岡田達信：『新・絵本はこころの処方箋』，瑞雲舎，2021，p 24～27.
- 6 絵本専門士委員会『認定絵本士養成講座テキスト』（独立行政法人国立青少年教育振興機構 2020）を参考。認定絵本士養成講座カリキュラムは、これら三つの分野から構成されている。